

主 題：主の御手にゆだねて

聖書箇所：詩篇 31篇

テーマ：どんな時も主の御手に自分をゆだね続けること

今朝、ともに見ていきたいみことばは詩篇31篇です。

まず、いつものようにみことばをお読みします。

詩篇31篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

「:1 【主】よ。私はあなたに身を避けています。私が決して恥を見ないようにしてください。あなたの義によって、私を助け出してください。:2 私に耳を傾け、早く私を救い出してください。私の力の岩となり、強いとりでとなって、私を救ってください。:3 あなたこそ、私の巖、私のとりです。あなたの御名のゆえに、私を導き、私を伴ってください。:4 私をねらってひそかに張られた網から、私を引き出してください。あなたは私の力ですから。:5 私の霊を御手にゆだねます。真実の神、【主】よ。あなたは私を贖い出してくださいました。:6 私は、むなしい偶像につく者を憎み、【主】に信頼しています。:7 あなたの恵みを私は楽しみ、喜びます。あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました。:8 あなたは私を敵の手に渡さず、私の足を広い所に立たせてくださいました。:9 私をあわれんでください。【主】よ。私には苦しみがあるのです。私の目はいらだちで衰えてしまいました。私のたましいも、また私のからだも。:10 まことに私のいのちは悲しみで尽き果てました。私の年もまた、嘆きで。私の力は私の咎によって弱まり、私の骨々も衰えてしまいました。:11 私は、敵対するすべての者から、非難されました。わけても、私の隣人から。私の親友には恐れられ、外で私に会う者は、私を避けて逃げ去ります。:12 私は死人のように、人の心から忘れられ、こわれた器のようになりました。:13 私は多くの者のそしりを聞きました。「四方八方みな恐怖だ」と。彼らは私に逆らって相ともに集まったとき、私のいのちを取ろうと図りました。:14 しかし、【主】よ。私は、あなたに信頼しています。私は告白します。「あなたこそ私の神です。」:15 私の時は、御手の中にあります。私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください。:16 御顔をあなたのしもべの上に照り輝かせてください。あなたの恵みによって私をお救いください。:17 【主】よ。私が恥を見ないようにしてください。私はあなたを呼び求めていますから。悪者はずかしめてください。彼らをよみで静まらせてください。:18 偽りのくちびるを封じてください。それは正しい者に向かって、横柄に語っています。高ぶりとさげすみをもって。:19 あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう。あなたはそれを、あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに身を避ける者のために人の子の前で、それを備えられました。:20 あなたは彼らを人のそしりから、あなたのおられるひそかな所にかくまい、舌の争いから、隠れ場に隠されます。:21 ほむべきかな。【主】。主は包囲された町の中で私に奇しい恵みを施されました。:22 私はあわてて言いました。「私はあなたの目の前から断たれたのだ」と。しかし、あなたは私の願いの声を聞かれました。私にあなたに叫び求めたときに。:23 すべて、主の聖徒たちよ。【主】を愛しまつれ。【主】は誠実な者を保たれるが、高ぶる者には、きびしく報いをされる。:24 雄々しくあれ。心を強くせよ。すべて【主】を待ち望む者よ。」

●ヤン・フス（1329－1384）

宗教改革を行った人物と言え、真つ先にだれの姿を思い浮かべるでしょうか？恐らく多くの方がヴィッテンベルク教会の門に『95ヶ条の論題』を打ち付けたあのマルティン・ルターを思い浮かべるかもしれません。そんなルターが誕生する100年ほど前、既にローマ・カトリック教会の腐敗を指摘し、後のルターに多大な影響を与えることになったひとりの人物をご存じでしょうか？それはヤン・フ

スという人物でした。1369年にチェコ共和国のボヘミアに誕生したフスは、プラハ大学にて神学を学び、後にはその大学の学長にもなりました。また、彼は同時にプラハで最もよく知られていた教会、ベツレヘム礼拝堂の説教者として多くの人々にみことばの教えに忠実であるようにと説いていました。ヤン・フスという人物は、当時の腐敗したカトリック教会のあり方を非難し、何よりも聖書とキリストの権威に立ち続けることを訴えた信仰者だったのです。彼が記した『デ・エクレスシア』という教会に関する著書の中にもこのようなことばが残されています。「教皇は教会のかしらではないし、枢機卿も教会のからだ全体ではない。ただキリストだけが教会のかしらなのだ。」と。こうしてフスはキリストの権威を大胆に示し、それに従うことを人々に求めていました。もしローマ教皇とキリストのことばが対立するようなことがある場合には、信仰者は聖書に従わなければならない、キリストこそが真の王であり、支配者なのだと言っていたのです。彼はすばらしい忠実な信仰者でした。でも容易に想像できるように、このような大胆な態度は彼の身に多くの苦難をもたらすこととなります。フスは彼のことをよく思わないローマ教皇やカトリック教会の手によって捕らえられ、数カ月の間、投獄されてしまいます。彼はその間、何度も何度も自分の考えや教えを撤回するようにと迫られました。もちろんその申し出を断れば、自分の身に危険が迫るということを彼もよくわかっていました。でも彼はそれを拒んで、最終的には異端者として火刑——火あぶりで処刑されていくのです。そんな彼の最期の姿に関して、ある著者はこのようなことを記していました。「ヤン・フスが火あぶりの刑に処せられたとき、その儀式を執り行った司教は、最後に冷やかな言葉を残した。『そして今、私たちはあなたの魂を悪魔に委ねます。』 それに対し、フスは穏やかに答えた。『主イエスキリストよ。私の霊をあなたの御手にお委ねします。あなたが贖ってくださった私の霊を、あなたにお委ねします。』」と。こうしてフスは燃え盛る火の中で息を引き取って行きました。

「主イエスよ、私の霊をあなたの御手におゆだねします」、これが死に至るまで主に信頼し、信仰を守り通した人物の最期のことばだったのです。今のことばを聞いて、どこかで同じことばを聞いたことがあると思いませんか？例えば最初の殉教者となったステパノも死の間際、使徒7：59－60で「:59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」:60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。」と叫んでいました。また何よりこのことばは、私たちの愛する主イエス・キリストご自身が十字架で亡くなる前に発した最後の祈りでもありました。ルカ23：46にも「イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。」と記されています。そしてこのことばは、興味深いことに、彼らが口にするよりもはるか前、きょう私たちが学ぶこの詩篇31篇に記されているのです。

ダビデは5節で「私の霊を御手にゆだねます。真実の神、【主】よ。」と述べていました。ダビデがこの詩篇を書き記した時、具体的にどのような歴史的背景のもとに置かれていたのかはよくわかってはいません。ある人はダビデがサウル王にその身を追われて荒野で逃げ回っている時に書かれたものではないかと考えていたりもしますし、またある人は彼の息子アブサロム率いる軍の反乱に遭い、いのちをねらわれ、イスラエルから逃げている間に書かれたものではないかと考えられていたりもします。残念ながら、私たちにはその詳細はよくわかりません。しかし言えるのは、この詩篇を記したダビデは、これまでに見てきたさまざまな詩篇と同様に、多くの敵によって追われ、死の危険を感じるほどのひどい苦しみに直面していたということです。彼自身のうちには置かれている状況を解決するための知恵も、策も、また力もありませんでした。肉体的にも精神的にも疲れ果てていました。しかしそのような困難の中で、彼は主の御手に自分自身のすべてをゆだねていたのです。ダビデはたとえ死が間近に迫ることがあろうとも、疑いを抱いて信仰を捨てることは決してなく、変わらず主に信頼し続けようとしていました。

だからこそ、そんな主への確固たる信頼のことばは、殉教していくほかの信仰者たち、もっと言えば十字架で死を迎えたイエス様の口からも同じように発せられていたのです。

○ダビデの信仰：苦難の中で主の御手にゆだね続けた二つの理由

では、ダビデは一体どうしてどんな時も揺るがされることなく、主に信頼し続けることができたのでしょうか？ダビデが持ち続けた信仰はどのようなものだったのでしょうか。人間的に考えれば、不安や恐れを抱いても仕方のない状況の中で、一体なぜダビデは心から安心して主の御手に自分の霊をゆだねることができたのでしょうか？これからその理由をともして見たいと思います。特に、この詩篇31篇を通して、ダビデは大きく二つの理由を私たちに教えてくれています。苦難の中で変わらずに主の御手にゆだねることのできた二つの理由です。私たちひとりひとりもこのみことばを通してダビデの残した模範を学び、どんな時も主の御手に心から安心してゆだねる者として成長していくこと、その助けと励ましになることを心から祈っています。

1. 主のうちにのみ助けがあると確信していたから 1－8節

まず一つ目の理由が1－8節に記されていました。苦難の中、主の御手にゆだね続けた一つ目の理由は、主のうちにのみ助けがあると確信していたからでした。言い換えれば、ダビデは自分の内やほかの何かに十分な助けがあると考えるとはいなかったということです。この詩篇はまず1節の初めに、

「【主】よ。私はあなたに身を避けています。」ということばで始まっていました。苦難の中に置かれていたダビデが一番最初にしたことは、自分と個人的な関係にある愛する主のうちに身を避けるという非常にシンプルなことでした。考えてみてください。彼が王様の時であれば、彼の周りにはさまざまな物があふれていました。兵力もあれば、財力もあれば、自分の持つ権力に拠り頼むことも容易にできたでしょう。また、王様でなかったとしても、周りの友人や自分自身の知恵や力に助けを見出そうとすることも、あるいはできたかもしれません。しかし、自分のいのちに危険が迫るその苦しみの中で、彼が信頼し、祈り求めたのはほかのだれでもない神様ただおひとりでした。

1) 「恥を見ないように」

そしてダビデは、その神様に向かって続けてこう懇願します。「私が決して恥を見ないようにしてください。あなたの義によって、私を助け出してください。」と。この「恥を見」という、そもそものことばには「栄誉や価値のあったものが覆って無に帰すこと」、もしくは「何かを信じていたが、結局は信頼に値しないと判明すること」といった意味があります。簡潔に言うのであれば、この「恥を見」ということばは、賞賛され、価値があったものが無価値な信頼できないものへと変わってしまうことを表していました。ダビデはそんなことばをここで使っているのです。「私が決して恥を見ないようにしてください」と。このことばを聞けば、まるでダビデが自分の立場や自分の地位を案じているかのように思えるかもしれませんがけれども、もちろんそうではありませんでした。彼の心にあったのは自分自身のことではなく、神様のことだったのです。彼はあることを案じていました。それはもし主にのみ拠り頼んでいるこの自分の身を主が助け出してくださなければ、周りの人たちは自分の姿を見て愚かな人物だとあざ笑うようになってしまう。もし悪を行う敵がそれを見て自分に勝利すれば、ただ神様に信頼していれば十分なのだと思っている信仰が力のない無価値なものになってしまう。それは結局のところ、ほかのだれでもない正しい義なる神様の御名が汚されてしまうと。だからどうか自分を救い出してくださいと、彼は願っていたのです。ダビデの心にあったのは自己中心的な思いでも、傲慢な態度でもありませんでした。悪には必ず報いを与えられる、ご自身に信頼する者を必ず守ってくださるという神様の義なるご性質と約束を知っていた彼は、その約束どおりに、そのご性質どおりに、神様が働かれることをへりくだって求めていたのです。以前見た詩篇25：2－3でも、ダビデは同じように神様の約束を信じて、「：2 わが神。私は、あなたに信頼いたします。どうか私が恥を見ないようにしてください。私の敵が私に勝ち誇らないようにしてください。：3 まことに、あなたを待ち望む者はだれも恥を見ません。ゆえもなく裏切る者

は恥を見ます。」と口にしていました。彼はあなたを待ち望む者はだれも恥を見ないという約束を信じていました。だから、その約束に応じて神様が働かれることを願っていたのです。

2) 「早く」

また、ダビデの置かれていた状況は緊急を要するものでもありました。だからこそ、彼は2節で続けてこう強く訴えるのです。31:2を見ると、「私に耳を傾け、早く私を救い出してください。私の力の岩となり、強いとりでとなって、私を救ってください。」と。ダビデは主が自分の叫び声に注意して耳を傾けて、早く自分のことを助け出してくださいと願っていました。ここで出てきている「早く」ということばに関して、ジェラード・ウィルソンという注解者はわかりやすくその情景を描いてくれています。「母親が友人と話をしているときに、母親の膝の上に座っている小さな子どものことを思い出します。母親の注意を引こうと何度も会話を邪魔した後、子どもは手を伸ばして母親の顔を自分の顔に近づけ、最も悲しげな声で「お母さん、どうして私の話を聞いてくれないの」と言うのです。この詩篇の著者の訴えは、即座に行動を起こさなければならない絶望的な状況に対して、神様の最大限で細心の注意を求めるものなのです。」と書いていました。どれほどダビデが切羽詰まっていたのか、自分の祈りに神様が早く答えてくださるようにと、どれほど熱く求めていたのか——。その様子を想像できません？この後9-13節のところで、どんな苦しみに遭っていたのかさらに詳細に触れられていますけれども、彼の置かれていた状況は一刻の猶予も許さない状況でした。だからこそ、ダビデは自分の身に死が迫る中、どうにかして神様が自分に答えてくださるようにと何度も熱心に求めていたのです。

◎私たちが本当に信頼しているものは？

では、彼の立場に立って少し考えてみてください。果たして私たち自身は彼のような苦難に直面した時に、真っ先に、熱心に神様に助けを見出そうとしているのでしょうか。もちろんほかの兄弟姉妹に頼ることや周りの者に助けを見出すこと自体が間違っているわけではありません。しかし、問題が生じた時、私たちの心に生じる一番最初の応答は、果たして主に抛り頼むことでしょうか？主に祈りを捧げることと、それ以外の何かに目を向けることではどちらに時間をかけているのでしょうか？問われることは、私たちが本当に信頼しているものは一体何なのかということです。

3) 「巖」、「とりで」

ダビデは自分に必要な助けをただ神様だけが与えることができると覚えています。もっと言えば、神様だけが自分にとって十分で、完全な力や助けを備えてくださると確信していました。だからこそ3-4節で「:3 あなたこそ、私の巖、私のとりでです。あなたの御名のゆえに、私を導き、私を伴ってください。:4 私をねらってひそかに張られた網から、私を引き出してください。あなたは私の力ですから。」と仰るのです。ダビデはここで主こそが巖であること、とりでであること、そして力であるとはっきりと口にしていました。巖にしても、とりでにしても、どちらも敵の攻撃から守りを与える、安全な場所を表していました。要するに彼は自分にとって神様こそが、どんな敵からも身を守ることができる、身を寄せることができる安全な場所、避難場所であるということがよくわかっていたということです。ダビデはこれまでにもいろいろな敵や問題に悩まされることがありました。でも、そのたびに主が自分を守り導いてくださって、助けを与えてくださって、救い出されてきたという経験を忘れることはありませんでした。それゆえに主の導きと助けにここでも抛り頼んでいたのです。

また、この箇所でもう一つだけ注目してほしい点があります。それはダビデが4節で「私をねらってひそかに張られた網から、私を引き出してください。」と願っていたことです。ダビデはここで自分をねらって仕掛けられている網、わなというものがあることに気づいていました。でも、それを取り除いてくださいと祈るのではなく、それにかかるような時に、私を引き上げてくださると願っていたのです。つまりポイントはこういうことです。ダビデのように主に忠実に歩もうとする者には、それをよく思わない者たちからのわなが、攻撃や迫害というものが必ず仕掛けられているということです。私たちが忠

実に歩いていこうとすれば、そこに問題や試練は必ず現れます。それに私たち正しい者が引っかかってしまうこともあるのです。でもダビデは、たとえどんなわなにかかろうとも、偉大な神様の力の前には助け出すことのできない問題は存在しないということを知っていました。神様は網にかかったものを引き上げることのできるお方だとダビデはわっていたからこそ、神様にそのことを求めていました。ダビデは神様がどのようなお方をよくわっていたからこそ、この神様に目を向けて、この方のうちのみ助けを求め、この避け所であり、力あるお方に身をゆだねていたのです。

4) 「あなたは私を贖い出してくださいました」

そして、5節に「私の霊を御手にゆだねます。真実の神、【主】よ。あなたは私を贖い出してくださいました。」と続いていました。ダビデは最後に「あなたは私を贖い出してくださいました」と言っていました。この時点でダビデが実際に苦しみから贖い出されていたのかはわかりません。なぜかという、この後、9節からダビデがさらに自分の味わっていた苦しみについて説明をしているので、まだ彼はこの時ひどい苦痛を味わっていたのかもしれない。でもたとえそのような状況の中にあってもなお、彼ははっきりと「あなたは私を贖い出してくださいました」と言うことができたのです。ダビデはまるで主の贖いがもう既に起こった既成事実かのように、ここで完了形を用いて口にすることで、それがこれから先確実にもたらされるのだと確信を抱いていたのです。この時のダビデの思いに関して、スチュワート・ペローンという注解者もこんな説明をしてくれています。「(ここでダビデはこのように言ったのでしよう)『これまでもあなたは私の贖い主であり、今もあなたは私の贖い主です。あなたは変わらないからこそ、私は、この災難からの救いを確信しているのです。』」と。ここで私たちが覚えておきたいことは、ダビデはどんな状況にあらうとも、愛する主のうちに救いがあることを全く疑っていなかったということです。彼の置かれていた状況は、確かにだれの目にも困難なものでした。彼は早く救い出してくださいと、一刻の猶予も許さないほどその身には危険が迫っていました。しかし、そんな中であってなお、いつも約束を守られる真実な神様から必ず必要な助けが与えられると信じていたのです。だからダビデは「私の霊を御手にゆだねます」と、私のすべてをあなたにゆだねますと、自分自身を喜んでみずから進んでこの主にゆだねることができたのです。

最初にも言ったように、このことばを口にしたのはダビデだけではありませんでした。私たちの愛する主イエス・キリストもあの十字架の上で、ご自身のすべてを父なる神様にゆだねて、同じ詩篇のことばを引用して大声で叫ばれていたのです。ルカ23:46で「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。」と。この主のことばを覚える時に、私たちが決して忘れてはならないことがあります。それは、イエス様は父なる神様のご計画に従って、みずからの意思で十字架にかかり、みずからの意思で自分のいのちを捧げてくださったということです。イエス様はこんなことばを残していました。ヨハネ10:17-18で「:17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。:18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」と。思い返してみれば、確かにイエス様は弟子のひとりユダに裏切られて、祭司長たちに売られました。確かにイエス様はご自分を忌み嫌う祭司長たちに法廷で訴えられました。確かにイエス様はその法廷ではっきりと無実であると判断されたにもかかわらず、民衆を恐れたピラトによって十字架に引き渡されました。確かに人々が嘲笑する中であって、ローマの兵士たちによって十字架につけられました。でも、これらすべてはただの偶然ではありませんでした。すべてがあらかじめ定められていた神様のご計画だったのです。イザヤ53:10にもこのように記されていました。「しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。」、イエス様が十字架にかかることは主のみこころでした。

では一体なぜイエス様が十字架にかかってその身をささげる必要があったのでしょうか？なぜこの方が砕かれなければいけなかったのでしょうか？それはほかのだれでもない私たち罪人がこの方の犠牲を必要としていたからでした。本来であれば、生まれながらに自分の望むままを歩み、創造主なる神様に逆らっていた私たちこそが、その罪ゆえに神様の御怒りを受けて当然の存在でした。一つの罪や汚れを赦すことなど絶対にできないこの聖く正しい神様の前に、罪を持って生まれた私たちはだれひとりとしてさばきを逃れることなどできませんでした。当然、永遠の地獄で罰を味わうことのみがふさわしい者でした。しかし、こんなどうしようもない愚かな罪人のために、ほかのだれでもないイエス様がみずから十字架にかかり、私たちが受けるべきその罪の罰を代わりに受けてくださったのです。私たちが神様に何か正しいことをしたからでも、喜ばせることをしたからでもありません。私たちが滅んで当然の罪人であった時に、キリストは進んで犠牲を払って死んでくださり、この方を信じ受け入れる者に救いを備えてくださったのです。これは神様が示してくださった一方的な愛でしかありませんでした。

改めて考えてみてください。この方は想像を絶するほどの痛みと苦しみを味わわれました。罪のいっさいない神の御子であるにも関わらず、いばらの冠をかぶせられ、むち打たれ、彼を取り囲む人々に神の子なら自分を救ってみろと嘲笑されながら十字架につけられました。また、そんな肉体的な苦痛以上に、この方は一時的に父なる神から引き離され、罪に対して燃える怒りを私たちの身代わりとなってその身に受けられたのです。それらは、この地上のだれも経験したことのない想像を絶するほどの痛みと苦しみでした。だから主も十字架にかかる前に、願わくはこの杯を取り除いてくださいと祈ったのです。この方は、自分に何が待っているのかをよくわかっていました。それでもなお、イエス様はこの苦しみをみずから味わって、父なる神のみこころに従い、その身を喜んで犠牲にしてくださいました。そして死を直前にして、「父よ。わが霊を御手にゆだねます」と言われたのです。この方は自分自身の死と復活が救いのご計画を完成させるということをご存じでした。だからこそ死を恐れることもなく、確信を持って父の御手に最後まで従い、すべてをゆだねられたのです。これが、キリストが私たちのために成し遂げられた救いのみわざでした。

ですからもし、この中にまだイエス・キリストにある救いをご自身のものとされていない方がおられるのであれば、きょうまだこの機会が残されている時に、自分自身の罪を悔い改めて、そしてこの方を自分の罪のために死んでくださった救い主として信じ、受け入れ、この方のために生きる人生を始めてください。この方はご自身のものに来て、この方を信じ受け入れる者に救いを与えると約束してくださいました。その救いをきょうご自分のものとしてください。兄弟姉妹の皆さん、ダビデはこうして真実の神であり、生ける力ある主の救いに確信を置いて歩んでいました。彼は自分の愛する神様がどのようなお方なのかということを知っていたからこそ、その方に安心してすべてをゆだね、困難の中であろうと、喜びを見出すことができたのです。

5) 「知っておられました」

残りの6-8節でも「:6 私は、むなしい偶像につく者を憎み、【主】に信頼しています。:7 あなたの恵みを私は楽しみ、喜びます。あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました。:8 あなたは私を敵の手に渡さず、私の足を広い所に立たせてくださいました。」と記されていました。ダビデは自分の悩みをいつもご存じでいてくださり、ともにいてくださるその主が必要な救いを与えてくださると強く信頼していました。自分を敵から守ってくださると信じて疑うことはありませんでした。感謝なことに、今の私たちも同じ主を見上げ、この主のうちに必要な助けを見出すことができます。だとすれば一体だれに私たちは信頼しようとしているのでしょうか？主のうちにのみ助けがあるという確信、これがダビデが苦難の中で主の御手にゆだね続けた一つの理由でした。

2. 主のあわれみのうちにのみ助けがあると確信していたから 9-22節

続けて二つ目の理由が9-22節に記されています。苦難の中、なぜダビデが主の御手にゆだね続けたのか、その二つ目の理由は、主のあわれみのうちにのみ助けがあると確信していたからでした。ここまで1-8節で苦難の中で主に信頼し、喜びや安心を見出してきたダビデでしたけれども、その様子が9節から大きく変わっていました。彼は自分が味わっていた苦しみについて、9-13節で再び詳しく説明して行くのです。このように続いています。「:9 私をあわれんでください。【主】よ。私には苦しみがあるのです。私の目はいだちで衰えてしまいました。私のたましいも、また私のからだも。:10 まことに私のいのちは悲しみで尽き果てました。私の年もまた、嘆きで。私の力は私の咎によって弱まり、私の骨々も衰えてしまいました。:11 私は、敵対するすべての者から、非難されました。わけても、私の隣人から。私の親友には恐れられ、外で私に会う者は、私を避けて逃げ去ります。:12 私は死人のように、人の心から忘れられ、こわれた器のようになりました。:13 私は多くの者のそしりを聞きました。「四方八方みな恐怖だ」と。彼らは私に逆らって相ともに集まったとき、私のいのちを取ろうと図りました。」と。

●ダビデの味わっていた四つの苦しみ

ここで少なくとも四つの面においてダビデが味わっていた苦しみが挙げられていました。

① 身体的／肉体的な苦しみ 9節

9節で「私をあわれんでください。【主】よ。私には苦しみがあるのです。私の目はいだちで衰えてしまいました。私のたましいも、また私のからだも。」と言っています。ダビデは自分を取り囲む危機的な状況によって、不安や苛立ちを覚えていました。先が見えない中で、敵に追われ、絶えず涙を流していたからこそ、その目からは正気が失われてしまっていたのです。彼のからだはもう疲れ果てていました。

② 精神的／感情的な苦しみ 10a節

10節の前半に「まことに私のいのちは悲しみで尽き果てました。私の年もまた、嘆きで。」と書いていました。ダビデはからだは弱り切っていただけでなく、彼の心に常にあった悲しみや嘆きによって心が落ち込み、弱り切っていたのです。

③ 罪悪感による霊的な苦しみ 10b節

続いて10節後半に「私の力は私の咎によって弱まり、私の骨々も衰えてしまいました。」と書いていました。「咎」と訳されていることばは、「罪悪感」や「間違った行為からくる苦悩」といった意味で取ることもできます。もちろん、ここでのダビデの苦しみは彼が犯した罪が直接の原因でもたらされた主の懲らしめだったのかもしれませんが、もしくは彼が過去に犯した罪に対する罪悪感といった苦悩が、彼の心を蝕んでいたのかもしれませんが、ここではっきりとはわかりませんが、彼は自分の咎によって霊的な苦しみをも味わっていました。

④ 人間関係における苦しみ 11、13節

11節や13節で「:11 私は、敵対するすべての者から、非難されました。わけても、私の隣人から。私の親友には恐れられ、外で私に会う者は、私を避けて逃げ去ります。……:13 私は多くの者のそしりを聞きました。「四方八方みな恐怖だ」と。彼らは私に逆らって相ともに集まったとき、私のいのちを取ろうと図りました。」と言っています。ダビデは彼のいのちをねらう数多くの敵によって悩まされていました。でもそれだけではなかったのです。彼は自分の友人からもさいなまれ、距離を置かれていたのです。彼の苦悩、名も知らないような数多くの敵にいのちをねらわれていただけではなくて、顔も名前も知っている親しい友が自分のことを非難しているのです。本当であれば、一番親身になって話を聞いてほしいのに、彼らは自分の声ではなくて、ほかの多くの人自分が自分に関して流す誹謗中傷に耳を傾けて、ひそひそと彼を陰でとがめていたのです。

だから彼は12節で、「私は死人のように、人の心から忘れられ、こわれた器のようになりました。」と言っていました。身体的にも精神的にも霊的にも、そして人間関係においても、あらゆる面で苦しみを味わっていたダビデは、まるで壊れて役に立たなくなった器のように弱り切っていたのです。文字どお

り、彼の周りを見渡して見ても、そこにいっさいの助けなどなく、自分のうちを見ても、彼のうちにはもう何かをする力や気力は残されていませんでした。ダビデには何も残っていなかったのです。ただ、その身には危険が迫っていました。

そんな絶体絶命の彼が、一体何をしたのでしょう？それはただ主のあわれみを求めることでした。人の手にはもうどうすることもできない状況に、唯一助けを与えることのできるお方に変わらず心をとめようとしたのです。だからこそ、9節の最初に「私をあわれんでください。【主】よ。」と書いてありました。また14-16節で「:14 しかし、【主】よ。私は、あなたに信頼しています。私は告白します。「あなたこそ私の神です。」:15 私の時は、御手の中にあります。私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください。:16 御顔をあなたのしもべの上に照り輝かせてください。あなたの恵みによって私をお救いください。」と続いていました。ダビデの周りには大きな危険が迫り、敵だけでなく友人たちからも拒絶されていました。自分の置かれた状況に心が容易に支配され、すべてに失望していてもおかしくなかったでしょう。しかしその中で、彼は神様に忠実であり続けようとしたのです。ありとあらゆる困難を前にして絶望してあきらめるのではなく、あなたこそ私の神ですと、ただ信頼していました。彼にとって唯一の希望はやはり神様のうちにしかありませんでした。

1) 「私の時は、御手の中にあります」

また15節の頭に、「私の時は、御手の中にあります」と、特に大切な表現が記されています。ダビデは一体何を言わんとしたのでしょうか？これは彼自身の地上での人生がどれぐらいの間あるのかということ以上のことを意味していました。彼の人生に起こるすべての出来事において、小さいものから大きいものに至るまであらゆることの裏には神様が働かれているのだと言わんとしたのです。私の人生に起こるすべてのことは、あなたの御手のうちにありますと。もっと言えば、これはその人のうちに起こる良いことも悪いことも、すべてのものが神様のご計画のうちにあるということです。例えば私たちが子どものころ、どこにだれと住んでいたのかということも、私たちが成長して大人になって、どんな学校や職場に行き、どんな問題や試練に直面するのかということも、私たちが抱える人間関係のことも、健康面におけることも、その他ありとあらゆるものすべてが主の御手のうちに起こっているということです。神様は、私たちが成功する時も、失敗する時も、強い時も、弱い時も、多くの困難を経験して苦しむ時も、いつもすべてを支配しておられ、私たちとともにおられるお方だということです。

そしてそんなすべてのことを支配しておられる方が、ご自分を愛する者のためにはすべてのことを益としてくださると約束されていたことを私たちは知っています。ローマ8:28に「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」と書いていました。私たちが救われたのも、神様のご計画に従ってのことでした。そしてご計画に従って召された者たちのすべてのことを働かせて益としてくださると言われていたのです。すばらしいと思いませんか？すべてを支配されている主権者なる神様が、私たちの身に起こるすべてのことをもうご存じだということです。私たちには理解できないものがあつたとしても、私たちに起こっていることはすべて神様の支配のもとで起こっていると確信を持って信頼し、そこに希望を見出すことができるのです。スボルジョンもこのようなことばを残していました。「もし私たちが、全ての時は神の御手の中にあると信じるなら、私たちは天の父から大きなことを期待するようになるでしょう。困難に陥ったとき、私たちはこう言うはずです。『私は今に神の不思議な業を目の当たりにし、ご自身に信頼する者を必ず助け出してください。改めて学ぶこととなります。』」と。スボルジョンのこのことばをよく考えてみてください。果たして私たちはこのような態度でもって歩んでいるのでしょうか？困難に直面する時に、どんな応答をしているのでしょうか？私たちが日々の生活の中であって、試練や困難に直面している時に、私たちが最初に考えることは、どうやってここから抜け出そうかということでしょうか？それともどうやってこの中で主に信頼し、主が教えてくれることを学ぼうかということ

でしょうか？私たち信仰者がいつも希望を置いて歩むことができること、それはどんな問題であろうとも、神様の御手のうちに起こっているということです。ダビデはそのことをよく覚えていました。それゆえに、その主の働きに期待していたのです。自分の時が御手の中にあると確信していたからこそ、彼は敵の手からも、追い迫る者の手からも、この方がいつか救い出してくださると確信していたのです。この同じ主に、私たちも希望を見出すことができます。

2) 「御顔をあなたのしもべの上に照り輝かせてください。」

また、このすべてを支配しておられる神様に信頼を置いていたダビデは、この方が自分に恵みを与えてくださるようにと願っていました。彼は16節で「御顔をあなたのしもべの上に照り輝かせてください。」と祈ったのです。この表現は以前にも見ましたが、神様が人々に恵みやあわれみ、平安、祝福を与えられるという意味で聖書の中で用いられているものでした。例えば民数記6：25-26には「:25 【主】が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。:26 【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』」とあります。ダビデは、主が自分に恵みを示してくださり、苦難から救い出してくださることを切に求めています。でもそう祈っていたダビデは、同時に、神様の恵みが自分に当然値するものだとは思ってはいませんでした。だからこそ彼はここで自分のことを「しもべ」と呼んでへりくだって主のあわれみを求めています。ダビデが置かれていた状況は、ほかに頼ることができる者がいない状況でした。しかし、彼は主の前にへりくだる従順な者には主が必ず報いてくださると確信していたのです。

3) 「私が恥を見ないようにしてください」

そしてそれと反対に、高ぶっているような敵たちには、その態度にふさわしい報いを主が与えてくださいと、ダビデは続けて祈ります。17-18節に「:17 【主】よ。私が恥を見ないようにしてください。私はあなたを呼び求めていますから。悪者はずかしくてください。彼らをよみで静まらせてください。:18 偽りのくちびるを封じてください。それは正しい者に向かって、横柄に語っています。高ぶりとさげすみをもって。」とあります。この詩篇の最初にも見たように、ダビデの敵たちはダビデのことを恥ずかしめようとしていました。彼らは困難の中で主に信頼してより頼む彼の信仰を愚かなものだと、ばかにしようとしていました。悪意にまみれた敵は彼をひどく苦しめていたのです。だからこそ、ダビデはそんな彼らの間違った態度に対して、義なる正しい主が必ず報いてくださるようにと祈り求めています。主のご性質に彼は変わらず信頼していたのです。

4) 「ほむべきかな。【主】」

ですから、ダビデはどんな時も変わらず主に信頼してへりくだって歩もうとしていました。そんな揺るがぬ信頼を主に置いて、へりくだったダビデの心にはどんな態度が生まれたと思います？それはあわれみを示してくださる神様に対する喜び、ほめ歌でした。そのことが19節から「:19 あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう。あなたはそれを、あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに身を避ける者のために人の子の前で、それを備えられました。:20 あなたは彼らを人のそしりから、あなたのおられるひそかな所にかくまい、舌の争いから、隠れ場に隠されます。:21 ほむべきかな。【主】。主は包囲された町の中で私に奇しい恵みを施されました。:22 私はあわてて言いました。「私はあなたの目の前から断たれたのだ」と。しかし、あなたは私の願いの声を聞かれました。私があなたに叫び求めたときに。」と続いています。ダビデは9-13節で、あれだけ悲しみや嘆きを覚えて、苦しみの中に置かれていたのです。死の危険が迫っていて、周りに助けを求めることなどできなかった、そんな絶望的な状況にいた彼がここでは「あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう」、「ほむべきかな。【主】」と喜びにあふれた賛美をささげていたのです。振り返ればダビデはさまざまな深刻な問題に取り囲まれていました。21節にあるように、まるで敵に包囲されて攻め立てられている町のように耐え忍ぶことがありました。だれにも助けを求めることなどできないような時もあったのです。しかし、そんな包囲された町の中で、ほかのだれ

でもない、ただ主が彼の願い声を聞き、豊かに恵みを施されていました。争いの中で彼が見出した避け所はやはり主の御手のうちでした。

ここまでダビデの揺るがない信仰を見てきて、ある人は思っているかもしれません。私はダビデのようにいつも主に信頼することができません、そんな弱さを持っていますと。実はダビデも同じでした。確かに彼は良い時も悪い時も、主に身をゆだねようとしていました。でも、22節にこんなことばがあります。「私はあわてて言いました。「私はあなたの目の前から断たれたのだ」と。」、ダビデは神様がどんなお方なのかをよくわかっていました。でも、そんな彼でさえ、苦しみの中、置かれた状況が余りにも厳しいことによって、神様が自分をまるで見捨ててしまっ、もう助けがないかのように感じ、慌てふためいてあきらめそうになったこともあったのです。しかし、そんな弱さを持っていた彼さえも、あわれみ深い神様は顧みて、彼の願いの声に耳を傾けられたのです。ダビデは完璧ではありませんでした。私たちと同じような罪人でした。しかし、ダビデの信頼していた神様は、確かに自分を信頼する者を決して見捨てることがなく、必要な助けを与えられるお方だったのです。だからこそダビデはそんな主のあわれみのうちにのみ、自分にとって十分な助けがあると、そう確信を置いて歩んでいました。そして、その確信が苦難の中であろうと、ほかの何かに目を向けることなく、主の御手にゆだね続ける態度を生み出していたのです。

○まとめ 23-24節

さて、ダビデは、不安や恐れを抱いても仕方のないような状況の中で、心から安心して主の御手に自分の霊をゆだねることができた理由を、私たちに教えてくれていました。彼は主のうちに、主のあわれみのうちにのみ自分に必要な助けがあると確信していたからこそ、どんな困難に直面することがあろうとも心をとめるべき存在を見失うことはありませんでした。そして最後に、そんなダビデが主を信じ従う今の私たちを含めすべての聖徒たちが熱心に求めるべき重要な責任を残してこの詩篇を締めくくっています。それが23-24節に記されていました。これまでのことを受けて、こんな責任が与えられるのです。「:23 すべて、主の聖徒たちよ。【主】を愛しまつれ。【主】は誠実な者を保たれるが、高ぶる者には、きびしく報いをされる。:24 雄々しくあれ。心を強くせよ。すべて【主】を待ち望む者よ。」と。ここ最近、何度も学んでいることですが、ダビデはここでも自分の経験したすばらしい神様の働きを自分のうちだけにどめていようとはしていませんでした。救いを与えてくださる主に対する感謝は、彼のうちからあふれ出して、ほかの兄弟姉妹の心にも流れ込み、一緒になって神様に賛美をささげ、この方を心から愛そうと促していたのです。これがダビデの歩みでした。

だとすれば、私たち自身はきょうどんなことを主に感謝し、この方をますます愛することができるでしょうか？ダビデは主のうちにある助けを信頼して、どんな時も祈り求めています。たとえ状況が困難に思える、そんな希望を失って諦めても仕方のないような状況であったとしても、彼は諦めることはありませんでした。それは主こそがすべてのことを支配しておられ、必ず約束を守ってくださるお方だと確信していたからです。主に待ち望み続けることのすばらしさを知っていた彼が「雄々しくあれ。心を強くせよ。すべて【主】を待ち望む者よ」と言うのです。この主は今も変わらず、私たちのすべての面において働かれています。今まさに苦しみの中にいる人も、この主を待ち望み続けることができます。必ず働かれるお方だと、私たちは信頼して歩み続けることができます。ダビデはそうにして歩みました。あのフスも最後までそのようにして歩みました。ステパノも最後まで歩みました。私たちの前に歩んでいた信仰者は、そのようにして最後まで歩み続けていたのです。ですから私たちもこの主を見上げて、どんな時も主の御手に自分をゆだねて信頼する者として、ともに歩んで行きましょう。